

第71回
山梨大学
卒業演奏会

日時：2022年2月17日（木）

会場：YCC 県民文化ホール 小ホール

主催：山梨大学

教育学部学校教育課程芸術身体教育コース音楽教育系

～プログラム～

《学部卒業生》

1. 清水 咲英 フルート独奏
2. 長谷川 美乃里 ピアノ独奏
3. 相澤 光 作品発表
4. 落合 麻希子 ピアノ独奏
5. 中村 美友 作品発表
6. 保坂 知里 クラリネット独奏
7. 佐藤 綾乃 ピアノ独奏

1. フルート独奏

フルート：清水 咲英

ピアノ：伊藤 咲紀

フルート協奏曲第2番ニ長調 Kv. 314 より 第1楽章

W. A. モーツァルト (Wolfgang Amadeus Mozart, 1756-1791)

この作品が作られた1778年、モーツァルトは仕事を求めドイツのマンハイムを訪れていた。結果として仕事を得ることはできなかったがC.シュターミッツやフルート奏者J.R.ヴェンドリングなどマンハイム楽派の影響を大きく受けた。ただし、この作品はモーツァルトが前年に作曲したオーボエ協奏曲をフルート用に転用したものとも言われている。

今回演奏する第1楽章はソナタ形式で作られている。提示部の第1主題をピアノが示す中、独奏フルートは高い二音へと駆け上がり、モーツァルトらしい明るく気品にあふれた音楽が現れている。続いてトリルを用いた音形が続き、当時流行のロココ様式を反映していると言えるだろう。第2主題は属調のイ長調で示され華やかな走句を経て展開部へと繋げる。展開部はトリルを用いた音形と技巧的な走句からなる短いものである。そして再現部の結びにはカデンツァが示され終わりを迎える。当時流行していた曲調からモーツァルトが受けた影響を感じさせる一曲である。

フルートとピアノのためのバラード

F. マルタン (Frank Martin, 1890-1974)

1890年にスイスのジュネーブに生まれたマルタンは幼い頃から音楽を学び、音楽学校には通うことはなかったがジュネーブ音楽院教授のラウバーに和声や作曲、ピアノなどを師事した。その後はチューリヒ、ローマ、パリで暮らすも、故郷のジュネーブやオランダでの演奏や教育、作曲活動にも注力した。

マルタンは“バラード”と名がついた作品を6つ作った。どの作品も独奏楽器とピアノまたはオーケストラで構成された作品群である。今回演奏する作品は1939年第1回ジュネーブ国際音楽コンクールフルート部門の課題曲として作曲された。

冒頭部は怪しげで陰湿な雰囲気をつまみながら始まる。続くVivaceでは、冒頭には見られなかったリズムや音の上下が現れ、フルートとピアノのリズムが掛け合う。リズムの掛け合いは当時まだ新しい音楽だったジャズの要素が感じられる。Cadenzaの後、今までの攻撃的な曲調から一転して落ち着いたかと思えば次第に速さを増し、Vivaceと冒頭のテーマが再現される。マルタンが生きた時代に高度な技術が要求されたことや音楽をより発展させようとした姿勢がこの作品から感じられる。常に張り詰めた雰囲気が魅力の一曲である。

2. ピアノ独奏

ピアノ：長谷川 美乃里

演奏会用アレグロ

E. グラナドス (Enrique Granados, 1867-1916)

1903年10月、スペインのマドリード音楽院はピアノ科卒業試験に使用する曲の作曲コンテストを開催した。その際、審査員の満場一致で優勝を飾ったのがこの「演奏会用アレグロ」である。

グラナドスは自身の演奏会でこの曲をたびたび披露し、そのたびに絶賛されていた。テクニカルに駆け抜けていくエネルギッシュで華やかなパッセージと哀愁を帯びたロマンティックなメロディーの対比が素晴らしく美しく、グラナドスの作品の中でも人気の高い曲となっている。

グラナドスは、1879年にバルセロナの音楽院で、ピアノで優秀な成績を修め、作曲に興味を持ってからも彼の作品から感じるロマンティズムは称賛されていた。1901年にはグラナドス音楽院を設立しピアノ教育に力を注いだ。特に美しい音の出し方とペダル用法には独自の教本を執筆し教材として用いていたという。そんな彼が理想とする響きをこの曲で再現し演奏したい。

3. 作品発表

1st trumpet : 相澤 光

2nd trumpet : 村松 俊哉

Horn : 池田 杜人

Trombone : 本田 浩夢

Tuba : 植村 昌弘

葛藤～金管五重奏のための～

相澤 光 (Hikaru Aizawa, 1999～)

トランペット2本、ホルン、トロンボーン、チューバのための作品である。

音が纏れたり、それが収束することで、何らかの岐路に立たされた人間が、人生における重大な選択において葛藤する様子を表現している作品である。

曲は5部から出来ており、続けて演奏される。

4. ピアノ独奏

ピアノ：落合 麻希子

ポロネーズ 作品 26-1 嬰ハ短調 Allegro appassionato

F. ショパン (Frédéric François Chopin, 1810-1849)

1836年作曲。ポロネーズらしい勇ましい冒頭から力強い旋律が特徴である。鋭く勇ましい部分とどこか影のある部分が対比され、魅力的である。後半からは変ニ長調となり、一転して穏やかな旋律となり、ショパン特有の優美で軽やかな装飾音も垣間見える。

ノクターン 作品 27-2 変ニ長調 Lent sostenuto

F. ショパン (Frédéric François Chopin, 1810-1849)

1835年作曲。作品 27-1 と併せてオーストリア駐仏公使夫人であった伯爵夫人に献呈されたことから、「貴婦人の夜想曲」と呼ばれることもある。左手の分散和音で伴奏が始まり、続いて右手で息の長い旋律が幻想的に奏でられる。左手が一貫して同じ形の伴奏を持続させているのに対し、右手はゆったりと歌うような旋律と、時折ショパン特有の細かく華やかな装飾音が煌めく。ため息のように消えていく終結部分も甘美で魅力的である。

12の練習曲 より 作品 10-4 嬰ハ短調 Presto

F. ショパン (Frédéric François Chopin, 1810-1849)

1829-1832年作曲。ショパンが作曲した、ピアノのための全27の練習曲の内の一曲。衝撃的なGis音から開始され、急速なテンポで進行する。右手の細かな動きが焦燥感を煽り、左手はスタッカートでさらに強調する。一曲を通して止まることを知らず、終結に向かってはさらに焦燥感が拍車をかけ、嵐のように過ぎ去る激しさが特徴である。

5. 作品発表

ソプラノ：中島 那李

バリトン：猪又 光貴

フルート：小俣 素美恵

パーカッション：兵藤 建希

ピアノ：中村 美友

秋の夜の会話

中村 美友 (Miyu Nakamura, 2000～)

本作品は、蛙の詩人とも呼ばれる草野心平の詩「秋の夜の会話」によるものである。

この詩では、冬眠を目前にした2匹の蛙が会話をしている様子が描かれている。冬が近づき、肌に当たる風が冷たくなってきた秋の夜に、痩せた姿で仲間と身を寄せ合って囁き合う蛙たちの日常の一場面を覗いたような世界が広がっている。蛙たちにとって冬眠は、生き永らえるためにするものであるが、天敵の多い自然界では無事に春を迎えられる保証はどこにもない。虫の鳴き声が響き渡るほど静かな夜に、抗うことのできない運命の流れに乗っていく蛙たちの姿から、寂しさや切なさを感じられる。

2匹の会話は、短い言葉でテンポ良く進んでいくが、最後には「さむいね」の呼びかけに対し、「ああ虫がいないね」と答えており、会話が囁み合わなくなる様子が描かれている。「土の中はいやだね」と話したそばから、片方を置き去りにして朦朧とした意識の中で冬眠に入っていく姿に、切なさがより一層浮かび上がってくる。

本作品では、詩から感じられる静かで冷たく、寂しい空気感を表現した。冷たく吹き抜ける風の音から始まり、少し会話が温まってきたところでリズムミク部分を迎える。リズムミク部分のテキストは、人間の言葉ではなく草野心平が描いた蛙語を引用し、どこか不思議な世界観が繰り広げられる。最後の場面では、だんだん思考が鈍くなっていく様子を返事までの時間の長さで描き、静かに幕を閉じる。

なお、テキストにおいては、草野心平の別の詩である「蛙」、「ごびらっふの独白」からも一部引用している。

秋の夜の会話

さむいね。

ああさむいね。

虫がないてるね。

ああ虫がないてるね。

もうすぐ土の中だね。

土の中はいやだね。

痩せたね。

君もずるぶん痩せたね。

どこがこんなに切ないんだらうね。

腹だらうかね。

腹とつたら死ぬだらうね。

死にたかあないね。

さむいね。

ああ虫がないてるね。

蛙 より

ぐりり るるり

ぐるり るるり

ごびらっふの独白 より

るてえる (訳：幸福)

なみかんだ りんり (みんな孤独で。)

6. クラリネット独奏

クラリネット：保坂 知里

ピアノ：穎川 桜子

クラリネット協奏曲 より 第1楽章 Allegro

J. フランセ (Jean René Désiré Françaix, 1912-1997)

フランセはフランスの新古典主義音楽の作曲家であり、ピアニストや編曲家としても活躍した。作曲家にしてピアニストの父と声楽家で合唱団を設立した母の元に生まれ、6歳から曲を作り始めたという。その後、ナディア・ブーランジェに作曲を師事し、モーリス・ラヴェルのすすめでパリ音楽院に入学する。パリ音楽院では、18歳の時にイシドール・フィリップのクラスで第一等を獲得。その後、20代前半から作曲家及びピアニストとして世界で認められるようになった。

作曲家としてのフランセは、同時代の作曲家たちのように無調性や十二音技法にこだわることはなく、新古典的な様式を土台としたフランス人らしい軽快さと機知に富んだ作品を多数生み出した。そのジャンルは、オペラ、バレエ、管弦楽作品、協奏曲、映画音楽、声楽音楽など多岐にわたる。

フランセは、作曲理念として「聴く人と演奏する人の両方に“喜び”を与えること」を挙げている。クラリネット協奏曲についても、「まるで曲芸飛行」のように楽しんで聴くことができる一方、「奏者は演奏中、常に恐怖と隣り合わせ。演奏に際しては図太い神経と数時間もの“飛行経験”が求められる。」と自身で語るほど、様々な意味での“喜び”を含んだ遊び心いっぱいの作品である。

今回演奏する第1楽章「Allegro」は、キャッチーな主題から始まり、スピード感を持って展開していく。

7. ピアノ独奏

ピアノ：佐藤 綾乃

バラード 第4番 ヘ短調 作品52

F. ショパン (Frédéric François Chopin, 1810-1849)

《バラード》という用語は、もともと文学の一ジャンルであり、ロマンティックな性格の物語詩である。器楽曲としてバラードを書いたのは、ショパンが最初の作曲家と言われている。ショパンのバラードは、全4曲からなる。その中から今回は、第4番を演奏する。起承転結のように物語が進んでいく他の3曲とは違い、陰影を帯びた主題が何度も現れ次々と変奏されていく。その中で、内省と感情の吐露を感じる部分がある。

バラード第4番が作曲されたのは1842年。恩師や親友の死があり、ショパンは精神的な打撃を受けていたと考えられるが、創作面では絶頂期を迎えている。その後、作品は減少していく。

曲は、自由なロンド形式で書かれている。序奏では、ハ長調で、音の綾が織りなされるようにして穏やかに始まる。ヘ短調の第1主題は、哀愁に満ちた旋律で、ショパンの心の憂いを優しさで包み隠したような微妙な色調を持つ。続いて左手のゆっくりしたオクターブの経過句を経て、神々しい楽想になる。続く主題は第1主題を複雑にしたものとなっている。第2主題では、変ロ長調となり祈りを感じるコラル風になっていく。長いパッセージが終わると再び第1主題がカノン風で現れ、その後左手の広音域の伴奏に乗って右手が変奏されたパッセージを奏でる。その後現れる第2主題は、変ニ長調に変わっている。左手の上昇音階に乗って右手が上品な和音でファンタジー溢れる旋律となっていく。この曲のクライマックスでは、両手の凄まじいアルペジオと調性のない狂気の凄まじい和音連打がありその後、嵐の前のような静寂が訪れる。最後は、猛り狂うコーダで全曲を締めくくる。

卒業論文題目一覧

《芸術身体教育コース》

相澤 光

部活動の歴史的変遷とこれからの部活動のあり方についての一考察

落合 麻希子

ピアノ教室の今日のニーズと効果的な集客方法に関する考察

佐藤 綾乃

音楽経験の差を超えた全員参加の音楽授業に関する一考察

清水 咲英

フルート初級者のための指導法研究
—ダイナミクス変化のイメージ伝達に注目して—

中村 美友

思いや意図を持った表現力を育てる歌唱指導の一考察

長谷川 美乃里

背景音楽の効果から考える教育現場の環境づくり

保坂 知里

クラシック音楽鑑賞に対する興味・関心についての一考察

《指導》

藤原 嘉文 G. グローマー 片野 耕喜

大内 邦靖 小島 千か 池山 洋子